

18 ウィーン宮廷の銀器シリーズ

ここは、かつての王宮銀器・食卓調度保管室の所蔵品を展示する最後の部屋です。中央ショーケースには、銀製の皿、プレート、ボウル、キャセロール、テリヌなどが展示され、当時、宮廷の日常生活に用いられた銀器の多種多様な内容を紹介しています。大量の銀から生産された食器類は皇帝の紋章で飾られ、清楚で優雅なデザインが印象的です。ウィーンの宮廷では専ら銀と金の食器が用いられたので、膨大な量の銀器が保管されていました。1710年以降ヨーロッパでも生産されるようになった磁器は、長らく、スープとデザートにのみ使用され、他の全ての料理は銀の食器で供されました。漸く19世紀の間に、家族的な食卓では磁器が次第に一般的となりました。

脇のショーケースには、金メッキの装飾品が見られます。

脇のショーケースには、金メッキの装飾品が見られます。タンブールと呼ばれる菓子容器、ブロンズに金メッキした豪華な燭台などは、新しいフランス風センターピースの一部で、このシリーズの他の品々は、いずれご覧いただけます。

中央のショーケースには、皇帝の紋章が施された銀製の食器類が見られます。

19 グラン・フェルメイユ

中央のショーケースには、皇帝の紋章が施された銀製の食器類が見られます。

銀器・食卓調度コレクションで、疑いも無く最も重要な展示品に数えられるのが、グラン・フェルメイユです。フランスにおける金細工の最高峰を示すこのセットは、当初40点の食器からなるものでした。これに1850年頃ウィーンの銀工房で追加品が制作され、食器は140点となりました。今日、この豪華なセットは4500点の食器からなり、重さも1トンを超えるものです。全て銀器に熱金メッキを施したもので、この技法がフランス語で「フェルメイユ」と呼ばれています。このセットにまつわる物語も興味深いもので、ナポレオンの出世から失脚に至る運命と密接に結び付いています。1808年に注文された豪華なセットの注文主は、ナポレオンの義理の息子ユージュヌ・ド・ボーアルネと考えられています。制作を担当したのは、パリのマルタン＝ギョーム・ピエネとミラノの金細工師エウジェニオ・ブルーサです。セットは、1805年から1814年までイタリアの副王であったボーアルネが、ミラノの宮廷で用いるため注文したのです。完成したセットはミラノに届けられましたが、ナポレオンの失脚後、ロンバルディア＝ベネト王国はオーストリア領となりました。ウィーン会議での取り決めによりフランツ皇帝は、ボーアルネからセットを買い取らねばなりませんでした。1816年、皇帝はカロリーネ＝アウグステとの4回目の結婚に際し、セットをウィーンに取り寄せました。このとき、食器に刻まれたイタリア王ナポレオンの紋章が、フランツ1世の紋章と取り替えられました。

脇のショーケースには、金メッキの装飾品が見られます。

20 ミントン工房の食器セット

脇のショーケースには、金メッキの装飾品が見られます。

ここで興味深いのは、英国ミントン工房の食器セットで、エリーザベト皇后からフランツ＝ヨーゼフ皇帝に贈られ、狩猟の際、オッフエンゼーの館で用いられました。これらは1870年にウィリアム・コールマンがデザインしたもので、昆虫、鳥、海の動物や植物が描かれています。

中央のショーケースには、皇帝の紋章が施された銀製の食器類が見られます。

21 衛生用磁器

1876年にエリーザベト皇后は、オーストリア皇帝家のメンバーとして初めて、現代的なバスルームを導入しました。それ以前には、今日見られるようなバスルームは全く無かったのです。この年以降も大半の宮廷人は、洗面器、水差し、足を洗うための桶、髭そり用のカップ、石鹸箱、夜間用の便器などで、間に合わせていたのです。展示品は同一のシリーズ製品ではありません。大半は白い磁器に金の縁取りや黄金の鷲で飾られていました。

22 旧銀器保管室の所蔵品、各種セット、銀製ナイフ・フォーク

宮廷銀器・食卓調度コレクションの最初の部屋には、王朝時代に製作された樫の木のショーケースが並んでいます。その中には、当時のウィーン、ハンガリー、ボヘミアの磁器工房で生産されたセットの一部や、個々の食器、更にボヘミアで生産された白地に金模様の衛生用磁器などが見られます。注目に値するのは、様々なカット・パターンによる美しいグラス・シリーズで、これはウィーンのお舗ロープマイヤーで生産されたものです。グリーンのグラスは、ライン地方で生産されたワインに用いられました。

脇のショーケースには、金メッキの装飾品が見られます。

部屋の中央にあるショーケースには、皇帝家の銀製ナイフ・フォーク・セットが見られます。これらのセットは、現在も国賓を迎える公式ディナーに用いられています。最初の大規模なシリーズは、1837年以前にシュテファン・マイヤー・ホーファーが生産したものです。その後は、後継会社である「マイヤー・ホーファーとクリンコシュ」商会に注文が出され、最終的にはヨーゼフ＝カール・クリンコシュが、皇帝家ご用達の業者となりました。興味深いのはナイフ・フォーク側面の装飾で、バイオリンのような曲線と流麗なラインは、今日も愛されています。

脇のショーケースには、金メッキの装飾品が見られます。

23 足洗いの儀式

ウィーンの宮廷には、何世紀にも及ぶ伝統がありました。復活祭前の聖木曜日に、皇帝は12人の男性の足を洗い、皇后は12人の女性の足を洗いました。これは、キリストが12使徒の足を洗った故事に因むものです。

脇のショーケースには、金メッキの装飾品が見られます。

このセレモニーには、貧しい人々の中から清潔な高齢者が選ばれました。四旬節の伝統的な料理による食事が供され、選ばれた人々にはプレゼントが贈られました。その内容は、ワインを入れた陶器製の蓋付きジヨッキ、双頭の鷲と年齢を刻んだ銀の杯、料理、30枚の銀貨を入れた袋でした。これは、イスカリオテのユダが、銀貨30枚でキリストを売り渡した故事に因んでいます。

脇のショーケースには、金メッキの装飾品が見られます。

儀式に用いられた金の洗面セット2組は、18世紀にアウグスブルクの銀細工師が制作したものです。このセットは、ハプスブルク家の人々の洗礼、公式のディナーにおける手洗い用、そして足洗いの儀式に用いられました。

脇のショーケースには、金メッキの装飾品が見られます。

24 フェルディナント＝マックス大公のディナー・セット

このセットは、かつてフェルディナント＝マックス大公の所蔵品で、トリエステ郊外のミラマーレ城にありました。フランツ＝ヨーゼフ皇帝の弟である大公は、1854年、帝国海軍の総司令官となり、1864年には招請に応じてメキシコ皇帝に即位しました。けれどもマクシミリアン皇帝は国内の混乱を收拾することが出来ず、1867年ベニト・フアレス率いる共和国軍に捕らえられ、戒厳令のもとで銃殺されました。この物語は、皇帝の部屋見学コースでも、ご紹介申し上げます。ディナー・セットは、ハンガリーのヘレンドで生産されました。ヘレンド磁器は、中国製磁器のコピーを出発点に発展したものです。マクシミリアン皇帝は1864年、チャプルテペックの離宮で用いるため、このディナー・セットを注文しました。1867年、ヘレンド磁器工房の所有者だったモーリッツ・フィッシャーは、許可を得て、ヘレンド磁器宣伝のため、完成したディナー・セットをバリの万博に出品しました。展覧会が終了したとき、マクシミリアン皇帝は既に銃殺された後でした。このためセットはメキシコに送られず、今日に伝えられています。

ここで銀器コレクションの見学コースが終わります。2階の「シシィ・ミュージアム」と「皇帝の部屋見学コース」で、フランツ＝ヨーゼフ皇帝とエリーザベト皇后の生活空間をご覧ください。

脇のショーケースには、金メッキの装飾品が見られます。

25 皇帝の階段

皇帝の階段には、豪華な漆喰装飾と、金メッキを施した銅の花瓶が見られます。フランツ・ヨーゼフ皇帝も、この階段を利用していました。

脇のショーケースには、金メッキの装飾品が見られます。

ホーフブルク王宮は600年以上、ハプスブルク皇帝の居城であり、神聖ローマ帝国の政治的中枢部でした。王宮は政府所在地であり、行政センターであると同時に、皇帝一家の冬の居城だったのです。宮廷の人々は18世紀以降、夏の期間を主にシェーンブルン宮殿で過ごしました。